第 I 章 序　章

1．周辺の地形

調査地は奈良県奈良市西大寺宝ヶ丘にある。奈良盆地北西部の丘陵上に立地し、近鉄奈良線西大寺駅とあやめ池駅の中間の線路南側の丘陵にあたる。遺跡の立地する丘陵は、奈良市の西部を南北に走る西ノ京丘陵の一部である。西ノ京丘陵は北で奈良山丘陵と一体となり、北北西から南南東に延び、南端は郡山市域に達する。東は平城宮などの立地する奈良盆地北部の沖積地に接し、西は富雄川をはさんで矢田丘陵と並行する。丘陵全体は、大阪層群に属する佐保累層におおわれ、海抜100ｍ前後の標高で、東の沖積地とは約30ｍの比高差をもつ。丘陵には小さな谷が樹枝状にはいり込み、所々には谷を堰き止めて作った溜池が見られる。調査地はその西ノ京丘陵の東縁辺部にあたり、丘陵と東からはいり込む谷が複雑に入り組む地形となる。遺跡はそうした丘陵の先端に二又状に派生した小丘陵の頂部から谷に面した斜面にかけて立地する。小丘陵にはさまれた小さな谷には東西約55ｍ，南北約20ｍの大きさの池と、池の西寄りに長径約20ｍ，短径約15ｍの中島が築かれている。

2．周辺の遺跡

旧石器時代，縄文時代　調査地を含む奈良県の北部では、旧石器時代と縄文時代の遺跡，遺物の分布は極めて稀薄である。旧石器時代では、菅原寺（fig2-29，以下同じ）の発掘調査の際にサヌカイト製のスクレーパーが１点出土している。また今回Ｈ調査区の奈良時代掘立柱建物柱掘形埋土から、旧石器時代のサヌカイト剝片が出土した。縄文時代では、平城宮内北西の佐紀池での調査（平城宮第101次調査、14）で、縄文中期の土器片が十数片発見された。いずれも運ばれてきた遺物であるため、遺跡の所在は不明である。

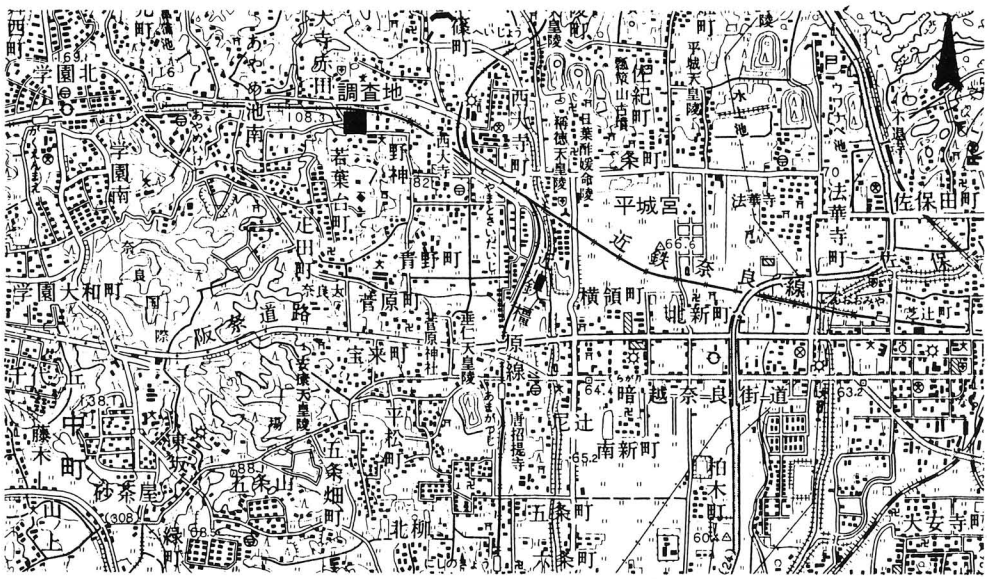

fig. 1　.調査地位置図（国土地理院発行５万分の１地形図「奈良」の一部を使用）

	遺　跡　名	所　在　地	遺　跡　　遺　物	時　代	文献
1	押熊火葬墓	押熊町	須恵器甕、土師器高杯、土師器壺	奈良	23
2	中山瓦窯群	中山町	瓦窯10基	〃	14
3	奈良山53号窯	山陵町	瓦窯３基	〃	13
4	秋篠少年院古墳	秋篠町	古墳２基、埴輪（円筒、形象）	古墳・後	21
5	津風呂町陶棺出土地	津風呂町	陶棺、刀子、鉄鏃他	〃	21
6	阿弥陀山寺	秋篠町	建物遺構、仏、瓦	奈良・後	1
7	西山火葬墓	〃	和同開宝２個、土師器甕	奈良	4
8	秋篠銅鐸出土地	〃	銅鐸４	弥生	2
9	秋篠寺	〃	塔跡、金堂跡、講堂跡	奈良・後	10
10	新堂寺古墳	菖蒲池松ヶ台町	円墳、陶棺	古墳・後	6
11	赤田古墳群	赤田町	円墳６基、埴輪（形象）	〃	11
12	赤田横穴群	〃	横穴２基、陶棺	〃	
13	平城宮跡	佐紀町		奈良	
14	〃　（第101次調査）	〃	土器片	縄文・中	13
15	〃　（第14次調査）	〃	竪穴住居跡、方形周溝墓	弥生・後	12
16	松林苑	〃	築地塀	奈良	
17	佐紀盾列古墳群	〃	前方後円墳、円墳、方墳	古墳・前	
18	右京一条北辺二坊二坪・三坪	〃	掘立柱建物、井戸、溝	奈良	16、17
19	開基勝寶出土地	西大寺宝ヶ丘	開基勝寶31枚等	奈良・後	8
20	右京一条北辺三坊一坪～四坪	西大寺新町	井戸、溝	奈良	17
21	西大寺奥の院	西大寺野神町	五輪塔	鎌倉～	3
22	西大寺	西大寺町芝町		奈良～	
23	西隆寺	〃　東町		奈良・後	5
24	右京二条三坊十一坪・十五坪	青野町	溝、塀	奈良	18
25	右京二条四坊三坪	菅原町	溝、井戸	〃	19
26	法世寺	疋田町		奈良・後	11
27	菅原遺跡	〃	基壇建物、瓦	〃	7
28	宝来横穴	宝来町	横穴７基、陶棺	古墳・後	22
29	菅原寺	〃	基壇建物、門、築地塀	奈良	9
30	右京三条四坊四坪	〃	溝、井戸	12世紀～15世紀	20

tab. 1　調査地周辺の遺跡

参考文献

1．泉森皎「阿弥陀山寺の調査」（『青陵』19　1970）
2．梅原末治『銅鐸の研究』（大岡山書店　1927）
3．川勝政太郎「西大寺奥院廟塔」（『史迹と美術』第100号　1939）
4．小島俊次「大和出土の二例の骨壺」（『古代学研究』15・16号　1956）
5．西隆寺調査委員会『西隆寺発掘調査報告』　1976
6．末永雅雄「生駒郡西大寺村新堂寺合葬陶棺」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査会抄報第２輯』1941）
7．菅原遺跡調査会「菅原遺跡の小型瓦」（『古代研究』25・26　1983）
8．田村吉永「開基勝寶の出土」（『大和志』第５巻１号　1938）
9．奈良県教育委員会『奈良県文化財調査報告書第12集　喜光寺旧境内緊急発掘調査報告書』　1969
10．奈良県教育委員会『奈良県文化財調査報告書第15集　秋篠寺境内発掘調査報告』　1971
11．奈良県教育委員会『奈良県遺跡地図　第一分冊』　1963
12．奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報　1965』　1965
13．奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報　1971』　1971
14．奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報　1973』　1973
15．奈良国立文化財研究所『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』　1977
16．奈良国立文化財研究所『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』　1978
17．奈良国立文化財研究所『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』　1979
18．奈良国立文化財研究所『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』　1981
19．奈良国立文化財研究所『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』　1984
20．奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和55年度』　1982
21．奈良市史編集審議会『奈良市史　考古編』　1968
22．森本六爾「異形の陶棺を発見したる大和国生駒郡伏見村宝来字中尾の遺跡について」（『考古学雑誌』第14巻５号　1924）
23．　〃　「大和国生駒郡押熊出土の骨壺」（『考古学雑誌』第14巻８号　1924）

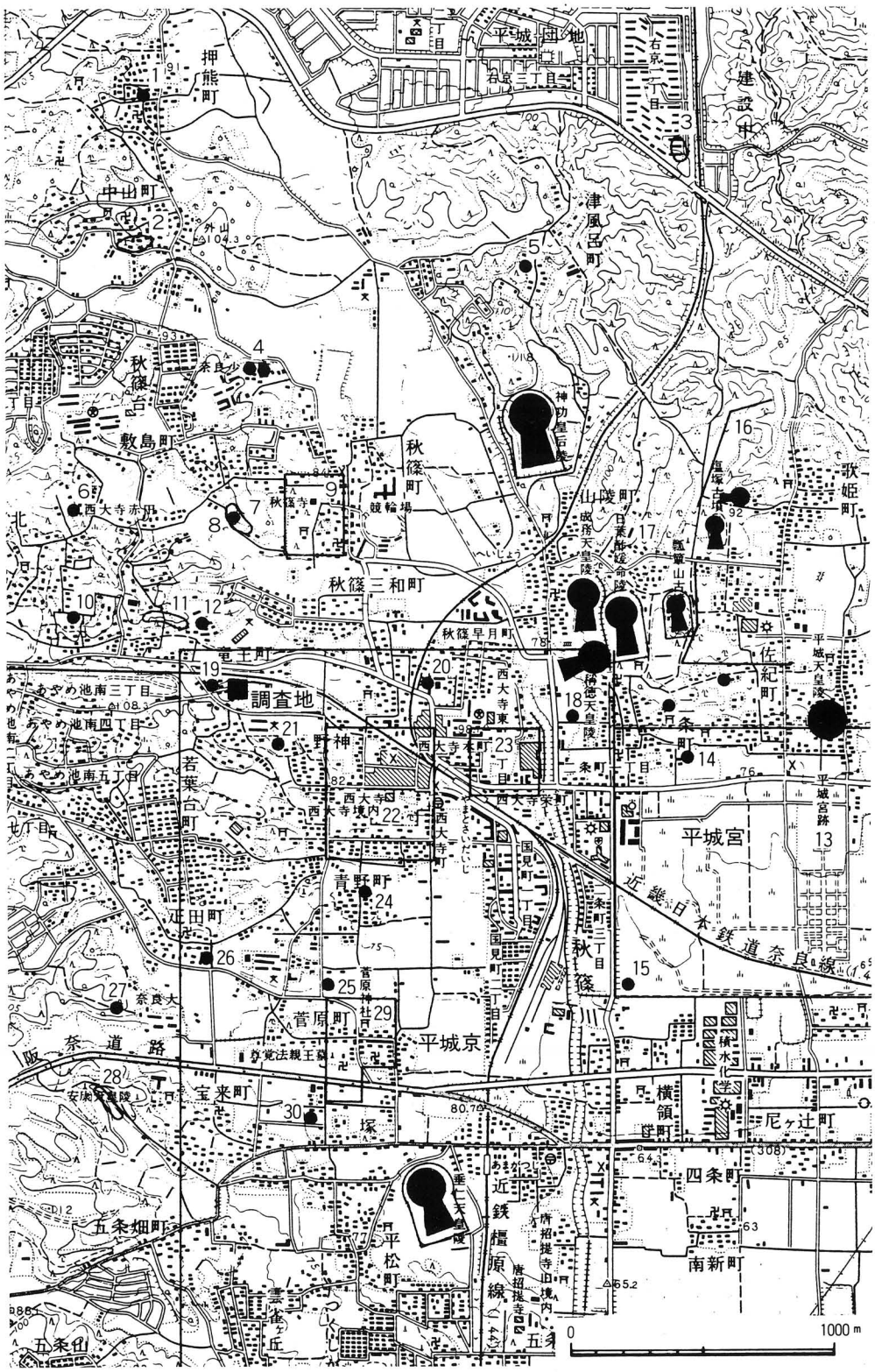

fig. 2　調査地周辺の遺跡

弥生時代　弥生時代の遺跡も奈良盆地南部に比して少ない。まず丘陵東側の沖積地では平城宮西南隅で行なわれた第14次調査（15）で、畿内第Ⅴ様式を主体とする竪穴住居跡，方形周溝墓などの遺構が検出された。西ノ京丘陵上では、秋篠寺の西方の丘陵(8)から外縁付鈕式銅鐸１個と、扁平鈕式銅鐸３個が２回にわたって出土している。また丘陵南部の六条山遺跡では畿内第Ⅴ様式期の集落跡が調査されている。

古墳時代　周辺では前期古墳は見られないが、佐紀盾列古墳群(17)は巨大な前方後円墳を中心とする中期の一大古墳群として周知のものである。後期古墳は、調査地周辺に点々と見ることができる。新堂寺古墳(10)は径16m、高さ３m前後の円墳で、小形の亀甲形陶棺２基が出土している。その東方の赤田古墳群(11)は、６基の円墳よりなる古墳群で、いずれも径10m前後の規模で埴輪を出土する。昭和58年には調査地の谷を隔てた北側の赤田横穴群(12)で、亀甲形陶棺をもつ横穴２基が発見された。今回の調査でも、整地層中から６世紀末の須恵器が出土したり、奈良時代の遺物にまじって形象埴輪の破片が出土しており、この丘陵上にも後期古墳の存在した可能性がある。

奈良時代　この地は平城京右京北辺坊に組み込まれる。北辺坊については、平城京一条北辺二坊二坪・三坪の調査（平城宮跡第103-16次調査、18）において、平城京造営当初から整備されていたことが明らかとなっている。しかしその規模についてはかならずしも明らかでなく、ここでは南北２坪分とする従来の見解にしたがっておく。この他周辺では条坊関係の小規模な調査が行なわれており、西三坊大路西側溝(25)、二条々間大路北側溝・三坊々間小路東側溝(24)が検出されている。今回の調査地周辺では条坊遺構の調査例はないが、遺存地割（fig３）によって推測することができる。伏見中学校の東側に東西と南北の細長い水田があり、それぞれ一条北大路と西三坊大路の痕跡と考えられる。いずれも幅は約20mである。また一条北辺四坊一坪と二坪の坪境小路も幅約15mの東西に細長い水田として残っている。西三坊大路の痕跡はこの坪境小路と交わりさらに北方に続いており、北辺坊は地割から少なくとも北へ２坪分存在していたと推定される。　奈良時代の寺院跡も多く、西大寺(22)、西隆寺(23)、秋篠寺(９)、菅原寺(29)、阿弥陀山寺(６)、法世寺(26)があげられる。また菅原遺跡(27)では東面する基壇建物が検出され、行基の建立した長岡院に比定されている。基壇建物に伴なって多数の瓦が出土し、そのなかに本調査地出土の軒瓦と同笵の軒瓦がある。平城宮北方に連なる奈良山丘陵には、平城宮所用の瓦を焼成した瓦窯群が点在する。中山瓦窯(２)、山陵瓦窯(３)の他にも、押熊瓦窯、歌姫西瓦窯、音如ヶ谷瓦窯などがある。押熊古墓(１)は、土師器高杯の上に人骨を入れた把手付きの土師器壺Ａをのせ、それを須恵器壺の外容器のなかに納入する構造の火葬墓である。秋篠銅鐸出土地と同じ丘陵(７)からは、骨蔵器と和同開珎が２枚出土している。蔵骨器として土師器甕Ａを用い蓋の破片が伴出している。和同開珎は甕の底部内面に置かれていたようである。

開基勝寶出土遺跡　昭和12年12月８日、生駒郡伏見村大字西大寺小字畑山802-1番地

において、宅地造成のための地ならし中偶然に発見された。その日のうちに開基勝寶25枚金板，銀盤などが出土したため工事を中止し、同月22日より25日まで周辺の調査が行なわれた。最終的には、開基勝寶31枚，金塊２個，金板１枚，銀銭残次１枚，銀盤２個が発見された。従来出土地については、田村吉永氏の「踏切（近鉄奈良線と調査地西側の道路が交差する所：編者註）の東方約一町線路の南側僅々田畑を隔て近接する丘陵」との記述からＪ調査区の北方に推定されていたが、今回『奈良市史　考古編』の記述や旧地番の調査，地元の方々からの聞き取り調査などによって、Ｊ調査区の西方約30ｍの地点(19)と推定するに至った。この地点は、右京一条北辺四坊七坪の東縁部で、今回調査した地点の西隣の坪に当たる。偶然の発見であったため、遺構は明らかでないが、1.鋳銭関係の遺構、2.地鎮もしくは鎮壇、3.銭貨埋納遺構、4.墳墓、5.火化地などの可能性を考えることができる。いずれにしても、今回調査した地点の性格を考える上で、重要な遺物である。

平安時代以降　周辺は耕地や山林になっていたことが古図や古文書からうかがわれる。今回調査した地点を含む西大寺北西の一帯は、西大寺関係の墓地や末寺の点在する地であった。史跡に指定されている西大寺奥の院には、叡尊の供養塔と称される五輪塔をはじめとする鎌倉時代から室町時代にかけての五輪塔群がある。また中世の古図によれば、秋篠寺の西方一帯は「西大寺寺山」と記されている。さらに阿弥陀山寺は西大寺末寺として描かれ、その北方には同じく西大寺末寺の瑜伽山寺が描かれる。ただし菅原寺南西で奈良市が行なった調査(30)では、土師器皿，瓦器椀，羽釜など、12世紀～15世紀の土器が出土し、集落の存在が推定されている。

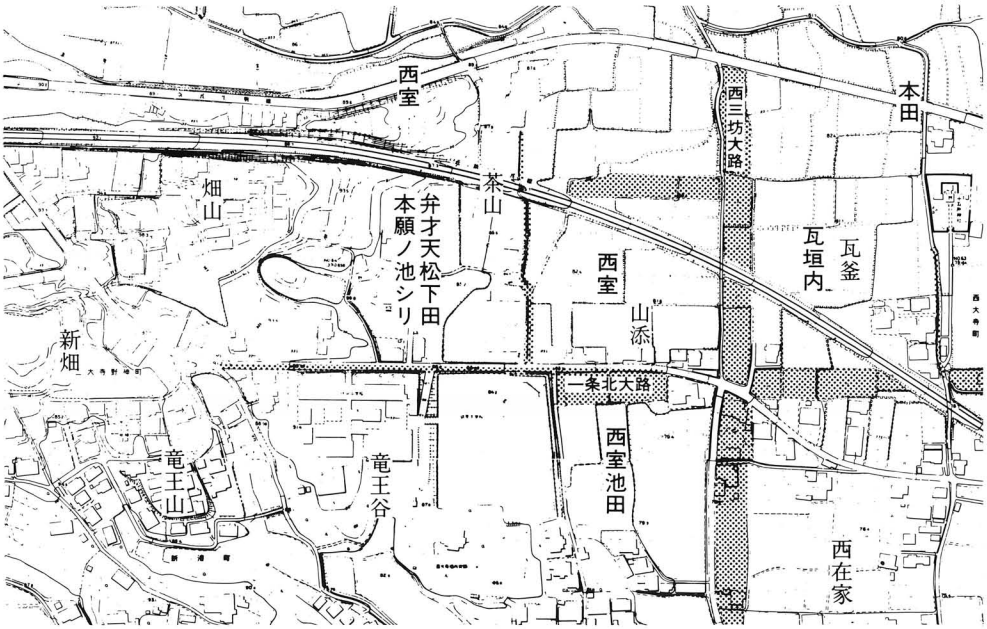

fig. 3　周辺の遺存地割と小字名等　　明朝体：小字名　　ゴシック体：文献に見える旧地名

（小字名等は橿原考古学研究所『大和条里復原図』　No.13による）

3．既往の調査・研究

今回調査を行なった平城京一条北辺四坊六坪を中心とする地域は、古絵図に「本願天皇御山荘跡」、「本願天皇山御殿」、「本願山荘」と記され、称徳天皇御山荘跡との伝承をもつ地である。古絵図類についての考察は第Ⅵ章-1で詳しくなされており、ここでは最近の調査・研究をまとめておく。

古絵図の記載にもかかわらず、この地が庭園や離宮，山荘との関係で取り上げられることは永らくなかったが、昭和12年の開基勝寳の発見によって世人の注目を集めるに至った。[註1] 開基勝寳出土地の性格が論じられるなかで、田村吉永氏は離宮説の説明として古絵図の記載を取り上げ、現存する池と中島を孝謙天皇山荘跡と考える旨の記述を行なっている。

昭和36年11月２日から10日まで、当研究所建造物研究室・遺跡庭園室が、池と中島を中心とする周辺の地形測量を行ない500分の1の実測図を作成し、古絵図の記述をもとに、称徳天皇御山荘宮殿の存在を推定している。[註2] その後この成果をもとに、森蘊氏が庭園史研究のなかに位置づけを行なっている。氏は昭和37年に『寝殿造系庭園の立地的考察』[註3] をあらわし、そのなかでこの池を取り上げ水系についての考察を行なっている。昭和49年に出版された『奈良市史　建築編』[註4] では、池周辺からの眺望が良好な点を取り上げ、山荘としての立地を論じている。

古代史からの研究は岸俊男氏によるものが唯一である。[註5] 氏は藤原武智麻呂伝にみえる習宜の別業についての考察のなかで、地名などからこの池周辺が習宜の別業であり、「彼（藤原武智麻呂：編者註）の死後しかるべき経過をたどって」称徳天皇の山荘として使用されるようになったと推定している。氏の論考によって、称徳天皇の山荘としての可能性の他に、習宜の別業であった可能性が示されるに至った。

昭和30年代から40年代にかけては、周辺の開発はそれほど進んでおらず今回の調査契機となった改築前の公務員宿舎が池の西北に建っているだけであるが、昭和50年代にはいると急激に住宅建設や宅地造成が激しくなる（PL．1，2）。それに伴なって今回の調査以外にも小規模な調査が４回にわたって計９ヶ所で行なわれた。その折の成果も本報告書に盛り込まれている。現在では、池の北と西にわずかに竹林が残る程度であとはほとんどが宅地化されている。池自体も宅地造成に関る擁壁工事で、景観が著しく損なわれている。

註１田村吉永　「開基勝寳の出土」（『大和志』第５巻１号　1938）Ｐ．22～28

２奈良国立文化財研究所「旧西大寺境内の地形と水系」
（『奈良国立文化財研究所年報　1962』1962）Ｐ．15～17

３森蘊　「平城京近郊に於ける地形・水系の調査」（『寝殿造系庭園の立地的考察』
奈良国立文化財研究所学報　第13冊　1962）Ｐ．44～45

４〃　「庭園」（『奈良市史　建築編』　1974）Ｐ．459～439

５岸俊男　「習宜の別業」（『日本古代政治史研究』　1966）Ｐ．429～460

4．発掘調査の経過と概要

本書は下表（tab２）の５回にわたる調査の報告書である。このうち第151-26次調査を除く４回の調査は、いずれも個人住宅の建設や宅地造成に伴う小規模なトレンチ調査で、幅２ｍのトレンチを池の東南部及びＨ調査区東北部の計７ヶ所に設けて行なった。

本書の中心となるのは、池西北部で1300㎡余を調査した第151-26次調査である。池の北西には木造の公務員宿舎19棟が建っていたが、老朽化のためこれを取り壊し、鉄筋コンクリート造りの宿舎２棟に建て替えられることになった。それに伴い、国家公務員共済組合連合会から建設工事に関する権限の委任を受けた大阪防衛施設局によって、発掘届が提出された。工事を行なう地は、従前より述べてきたように称徳天皇山荘跡推定地であり、重要な遺構の存在が予想された。そこで奈良県教育委員会と協議のうえ、事前に発掘調査を行ない、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部がこれを担当することとなった。

まず12月１日から同９日まで、遺構の遺存状況を確かめるため、幅３ｍの東西トレンチを３ヶ所に設け予備調査を行なった。その結果敷地の西端近くで掘立柱建物の柱掘形３個

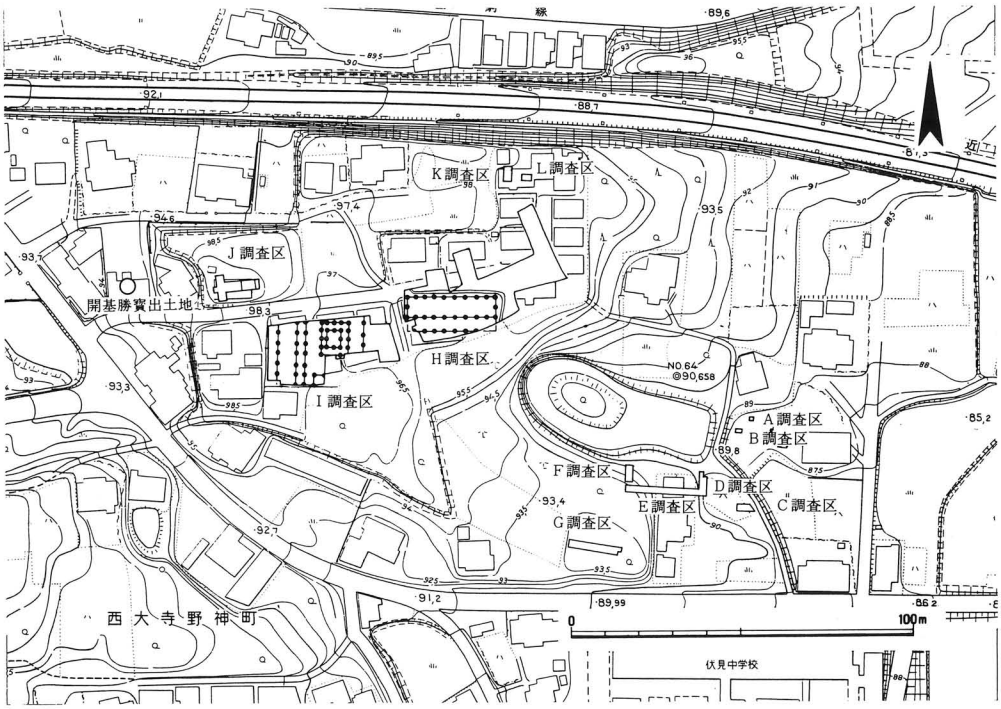

fig. 4　調査区位置図

次　数	調査地（奈良市西大寺宝ヶ丘）	調　査　期　間	調査面積	位　置	備　　考
118- 2	761番地	昭和54年 4月24日～25日	4㎡	A, B	宅地造成
118-20	744, 745, 746-1, 746-3, 747番地	昭和54年11月 7日～16日	96㎡	E, F, G	住宅建設
151- 6	744, 745-1番地	昭和58年 6月22日～23日	23㎡	C, D	宅地造成
151-26	770, 796番地	昭和58年12月 1日 ～昭和59年 3月 1日	1340㎡	H, I, J	公務員宿舎 改築
156-11	776-1番地	昭和59年 6月22日	17㎡	K, L	住宅改築

tab. 2　調査一覧表

が検出されるとともに、奈良時代の整地層が厚く残っていることが明らかとなった。このため、防衛施設局、奈良県教育委員会、当研究所の三者で協議の結果、予備調査のトレンチを拡張するかたちで本調査を行なうこととなった。

調査に当っては当研究所で採用している地区割りにしたがって6AGT-M地区と定め、さらに国土方眼座標（第６座票系）の基準点（X＝－144870.000m　Y＝－20424.000m）をMO01とする３m方眼の小地区を設定した。調査区は建物の建設位置を中心とし、H調査区では敷地北部での遺構の状況をさぐるため、２ヶ所で幅５mのトレンチを北西方向に伸ばした。I調査区では予備調査で掘立柱建物掘形が検出された西端を南北に拡張した。また敷地北西隅の受水槽設置位置に、J調査区として幅２mのトレンチをT字形に設けた。

当該地には旧宿舎のコンクリート基礎や側溝、土管などが縦横に通っており、まず12月15日、16日の両日、重機を用いて表土の掘削を行なった。その後人力による遺構検出作業にはいった。遺構検出の進展に伴いH調査区で大形の掘立柱建物が検出されたため、翌年の１月９日よりH調査区の西部を南へ拡張した（第一次拡張）。１月26日、27日には、調査成果の説明会を現地で行なった。並行して実測にはいり、実測終了後１月30日より補足調査を行なった。この間、遺跡の重要性が次第に明らかになってきたため、遺構の保存と今後の調査の進め方について三者の間で話し合いが行なわれた。その結果、SD1010とSA1060とに囲まれた区域の保存が決まり、建物の位置を北へずらすことになった。それに伴なって、新たに建物位置となる区域をひき続いて調査することになり、H調査区西端とI調査区の西側⅔を北へ拡張し（第二次拡張）、２月３日より拡張部分の調査にはいった。I調査区で平安時代の火葬墓の発見があったため、慎重に調査を進めるとともに、火葬墓と柱掘形の遺構断面の転写をあわせて行なった。拡張区の補足調査を２月27日に終え、遺構養生のため砂を厚く敷いた上に埋戻しを行ない、３月１日にすべての調査を終了した。

調査の結果、東西棟の大形掘立柱建物、南北棟の桁行の長い掘立柱建物、四面庇付掘立柱建物、および平安時代の火葬墓群などを検出した。これらの詳細については、次章以下で詳述する。全体に後世の削平を被っており遺物の出土量は少ないが、遺構の残りは比較的良好である。さらに今回の調査で、建物群の中心がI調査区南側の平坦地に及ぶことが推定された。

fig. 5　現地説明会

1983年	12月 1日～ 9日	予備調査
	12月15日	本調査開始
1984年	1月 9日	第１次拡張
	1月26・27日	現地説明会
	2月 3日	第２次拡張
	2月27日	補足調査終了
	3月 1日	埋戻し終了

tab. 3　調査経過